

## 山上に山あり 山また山

平成30年度のスタートです。昨日、榴ヶ岡公園の桜もついに咲き始めました。

上海（虹橋校）に旅立つ淳先生を含め9名の先生方が異動し、上海（浦東校）から帰国した村上先生を含め9名の先生方をお迎えすることができました。また非常勤職員や支援員の方々も加えると総勢15名が新たに加わっていただいたこととなります。

全職員の約1/3の異動です。新たに私たちの仲間に加わった先生方は「附属」ということで多少不安な気持ちもあることと思いますが、若い職員が多く、明るく前向きな職場です。焦らずにじっくりと附属の文化に馴染んで欲しいと思っています。

年度当初にあたって、新たに着任する先生方もこれまで勤めてきた先生方も含めて、もう一度本校の特色について整理してみたいと思います。



### 3つの使命

本校は「初等普通教育」「実践研究」「教育実習」の3つを使命にした大学の附属学校です。

また、学校教育目標「体も心もたくましく、しかも、しなやか子供」は昭和49年から継続して掲げています。そのために日々の教育活動の根幹に「体育的な活動」と「合唱活動」そして「たてわり活動」が位置づけられています。その象徴が「第41回なかよし運動会（9月）」と「第45回合唱の会（12月）」であり、集大成が「第52回卒業式」です。

（※回数は平成30年度の回数）

### 教師は授業で勝負する

宮城教育大学の附属学校として変わらず大事にしていることは「教師は授業で勝負する」ということです。これは私たちが授業こそが学校教育の中核であると認識しているからです。また、研究で大事にしていることは実践的な研究を行うこと、つまり、子どもの事実で検証する、ということです。このような考えの背景には、宮城教育大学で教鞭を執られた齋藤喜博氏や林竹二氏、横須賀薫氏（元校長）などの実践や教えが代々受け継がれていることにあります。

### 本校の自慢

何と言っても本校の自慢は明るく開放的で元気な子どもたちです。その源は朝の校庭での様子に集約されています。子どもたちは仙台市内を学区とし、遠い子は公共交通機関で通学します。子どもたちは朝学校に着くと、通学服から運動着に着替えます

（※もちろん教師も同じです。また、教育実習生にも、服装は職への敬意や社会人としての常識を反映しているものとして指導しています。同時に夏季はクールビズも励行しています。）

さわやかな1日のスタートはどの学級も朝の遊びから始まります。天気がよい日の校庭では、子どもたちと先生方が一緒になって校庭を駆け回ります。1年間を通して、校庭から子どもたちの歓声が途絶えることはありません。

（※ただし、教師も子どもも運動着で1日を過ごすのはこのためだけではありません。本校の教育活動の根幹に「体育的な活動」があること、そして授業では「体験的な活動」や「総合」を大事にしてきた経緯も影響しています。）

2つ目の自慢は給食です。裕子先生が中心に進めてくださっている「食育」は全国的にも注目されています。給食は論より証拠。ぜひ楽しみにしててください。

### 3部制

次に特色ある学校運営について紹介します。学校運営は大きく研究部・教務部・指導部に分かれて行

います（3部制）。新しい先生方も必ずどこかの部に所属し仕事をお願いしています。研究部は研究推進が中心です。教務部は行事やその行事に向かうまでの年間活動をコーディネートします。今年度、「学校行事部」から「教務部」に戻したのは、行事を含めた日々の活動を教務主任が中心となってコーディネートする、という位置づけを明確にしたかったからです。指導部は子どもの基本的な生活習慣や自主的実践的な活動をリードします。

## 教科部

本校の教科部は他の小学校の教科部と大きく違います。それは、この教科部こそ研究の母体であるからです。教科部の所属は原則希望で決めますが、校内事情で他の教科部での研究をお願いすることもあります。また、ほとんどの教科部にOB会があり、OBとのつながりを大事にしていることも特色です。

## 学年

先生方が一番多くの時間を共有するのが学年です。附属小は6つの学校の総合体です。だから、よほどのことがなければ校長（副校長）が文書や学年に関する事で決裁することはありません。初めは驚かれると思いますが、学年のことはほとんど学年主任が決裁権をもって運営しています。いわば学年主任は120人の学年の子どもの「校長先生」です。それだけ権限がある反面、責任が重いのも学年主任です。この背景には、昔から附属小が創造的な教育活動を大切にしてきたこと、自由な雰囲気の中で教育の理想を求めながら、お互いが切磋琢磨できる集団であったことにあります。そして、実際に学年を動かすのが学年副主任です。多くの学校では教務主任の先生が週報を作成し、打合わせで確認しますが、本校では各学年の副主任が原案を作成し、学年会の要項とともに提示します。また、本校の特色である生活科と総合のプランニングを行うのも副主任の大事な仕事です。だから学年副主任は教頭先生であり教務主任であり研究主任でもある理由です。

（※ちなみに、附属小では「副」と付く立場が一番忙しいと言われていています。3部の副部長、教科部の副主任、学年副主任さらには実習副主任……。忙しいけれども自分で子どもたちや先生方、学生を動かすことができるのですから、やりがいも大きいのも「副」の仕事です。）

## 教務主任・学内主幹・学内教頭

このような6つの学校の連絡・調整役、学校行事の仕切り役が本校の教務主任です。だから校内のことは全て教務主任を中心に回っていきます。

そして、管理職として学内教頭と学内主幹が配置されています。

二人は管理職ですから校務全てのことを管理することが仕事です。でも、それは先生方を厳しく管理する、という意味ではなく、根本には子どもたちと先生方が全力で日々の教育活動に向き合うことができるような環境を築くことにあります。学内教頭も学内主幹も内部昇任なので、先生方の気持ちは一番よく分かっています。この内部昇任制度のメリットは附属小のよき文化（切磋琢磨）を後輩に伝えてきたことにあります。ここに40年以上教育目標を継続し、また、なかよし運動会や合唱の会を継続してきた原動力があります。

## 課題

昨年、国の有識者会議で、附属学校の存在意義について改めて問題提起がありました。これまで以上に地域に発信すること、現職教員の研修学校として活用されること、そして附属でなければできない特色ある教育を行うことが求められています。

同時に、教員の長時間労働解消をはじめとした働き方改革も喫緊の課題です。この、一見矛盾するような課題への私たちなりの答えが今年度の2月の2日間公開でした。

右の写真は正門を出たところのがん検診センター跡地の石碑です。「山上に山あり 山また山」がん検診の集団検診発祥の地としての業績とがん対策の創始者黒川利雄先生の偉業を顕彰して残されています。

時にこの言葉は私たち附属小学校職員に対してのメッセージのようにも受け取れます。いよいよ平成30年度のスタート。吉川校長先生も任期の最終年度になります。新たな気持ちで職員一丸となって、新たな附属小の歴史を創ることを期待します。



（文責：副校長 手代木）